

島根教神協会報

発行日/令和4年10月15日

発行者/島根県教育関係神職協議会

第41号

言霊の幸ふ国

副会長 陶山 浩正



新型コロナウイルスの感染

拡大が収まらない。三年にもわたる感染拡大の中で、他県にいる小中学生だった孫たちは、ほとんど顔を見ないまま中高生になった。会えないのは寂しい限りであったが、その分ラインでのやり取りが増え、日々の楽しみとなった。ただその中で気になることがある。こちらは会えないものだからあれこれ書き連ねるのだが、返ってくるのは、「あ

りがとう」「楽しかったよ」とか「〇〇したよ」の単語や短文ばかりで、時にはスタンプ一つの時もある。それらが数回に分かれて送られてくる。おまけに「じいちゃんのラインは長いねえ」と言われる始末である。味気なさと、孫たちには論理的に説明する能力がないのではと思い、電話をしてみると、ちゃんとした受け答えができる。どうやら簡潔、短文がラインの主流であるようだ。

こうしたことは小生と孫たちとのことだけでなく、教育現場でもみられるのではない。コロナ禍やデジタル化の中で多くの学校でリモート授業が行われている。そこでは、授業や用件を成立させることが優先され、より簡潔かつ平

易でストレートな表現が必要とされるだろうが、そのために論理的な思考経路や日本語が持っている歴史的、社会的、文化的な含意が削り取られているのではないか。加えて、学生たちはSNSなどのプラットフォームなツールによって誰とでも繋がれるという便利さや気軽さを最優先し、もの事の良し悪しの判断を、「いいね」「ひどい」といった表現で済ませてしまっている。しかし、こうした表現は感情や感覚であって、それがあたかも意見であるかのように拡散してしまっている。

こうした状況下だからこそ日本語の重要性について改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。コミュニケーションは、自らの表現のみで

なく、それ自体が感情の交歓や関係の紐帯であり文化的な体験でもある。そして言葉は自らを支える道具であり、相手に分かってもらうための手段でもある。依頼したり、感謝を伝えたり、また言いにくいことを伝えたりする場合、相手の事を思い遣ったり、敬意を含んだ表現によって心理的な負担を和らげ、円滑なやり取りや合意がなされることもある。しかし、こうしたやり取りは形式張って面倒くさいといった風潮になりつつある。それらが不要なものとして切り捨てられ、合理化され、スリム化されることで分かりやすくなったとするのが現代である。何とも味気ないものではないか。

ただ、そうは言ってもすぐ

に日本語の豊かさが失われるわけではない。想像力をもって相手の世界に思いを巡らせること、つまり、自分が相手にどのような見えるか、自分の思いや考えをどうすれば相手に伝えられるのかと試行錯誤することにより日本語の豊かさは維持されると思う。

全国 の教育現場において、対面授業や直接的なコミュニケーションが制限されてしまったことにより失われてしまったものは何かを考えるより、これまでのコミュニケーションに含まれていた日本語の豊かさとはどういうものかを考えてみるべきではないか。そうする良い機会が得られたと捉えるべきである。何より私たち神職は、「言霊の幸ふ国」に住む言霊を扱う者だから。

現職教員等 研修会に参加して

出雲支部 山崎 寧子

六月十八日、神社本庁にて開催されました。開催はハイブリット方式で、会場参加18名、Zoomでの参加26名でした。島根県からは廣江会長と私の二人の会場参加です。

国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和、教育勅語奉読は全員での唱和、奉読はなく、拝聴する形で行なわれました。



研修会の様子

講演は、講義Ⅰ、講義Ⅱの二部構成でした。

◆ 講義Ⅰ

「国産麻栽培の重要性と伝統文化」

皇學館大學教授 新田 均 先生

いままで私は、大麻は麻薬の一種であるというイメージを持っていましたが、日本の大麻には毒性がほとんどないと聞いて目からうろこでした。アメリカの大麻は毒性があり、それと同一視したGHQが日本の大麻を禁止し現在に至るそうです。古来より、麻は神事だけでなく、日本の伝統文化の様々な場面で使われてきました。しかし、今や伝統的な麻の生産農家は十一軒となく、その存続も危ぶまれています。神社で使う麻の90%は中国産になり、ビニール製で

代用されることもあります。毒性が少なく麻薬にはならない日本在来種の大麻草の復活を訴えられていました。

◆講義Ⅱ「共存・共栄の思想」

國學院大學教授 菅 浩二 先生

「共存・共生のための宗教・精神文化の役割はどこにあるか」を考える上でSDGsに着目し、「人間の欲求に基づく経済活動に対する倫理的責任」「伝統的生活の知恵と大量消費・営利の相克」「人新世 人が環境に与える影響」「近代国家行政ではない活動（NGOなど）が導く公共」と4つの視点について説明され「神道はどのように応答できるか」を参加者に問いかけられました。その上で世界への開かれた視点を持つ上で「神道がと

ても重要な足場になる」更に、神と人との交わりや自然との関わりについての考察、現代神道に求められる視角などのお話がありました。

全教神協 全国大会に参加して

出雲支部 塩野 清明

八月十日、十一日愛知県名古屋市のホテル・ルブラ王山を会場として全教神協全国大会が開催された。コロナ禍により三年ぶりの全国大会には



全国大会の様子

各地から62名の参加があった。先ず創立六十周年記念式典から始まった。

神宮遙拝、国歌斉唱、教育勅語奉読と進み寶来会長挨拶、ご来賓として神社本庁田中恒清総長より、全教神協全国大会には毎回出席をしている。

ていない」から今、日本は何をしなければならないか。直面している台湾有事は日本有事でもある。NATO並みのGDP2%以上の防衛予算ときちんとして軍隊をもつことがパワーバランスを保つ上で極めて重要であると感じた。

結成以来六十年に亘り神道精神の昂揚に努め、青少年の教育の正常化に尽力されたことに敬意と感謝を申し上げます。記念式典のご祝辞を頂いた。記念式典に引き続き、総会令和三年度事業報告、決算報告、令和四年度事業計画、予算案審議と続いた。

記念講演は、宮澤浩司先生による「細井平洲から学ぶおしえ」であった。江戸時代後期の地元平島村（東海市）生まれの儒学者。24歳で江戸に私塾「嚶鳴館」を開き、特に、米沢（山形県）藩主となる上杉鷹山公の師となる。窮乏を極めていた藩財政を一代で立て直したことで有名。大名から一般の人まで幅広く交流し、教えを広めていったところが、今でも皆から慕われる要因であらう。

中央研修会の基調講演は倉山満先生の「ウクライナ危機の打開策を日本近現代史から学ぶ」であった。ウクライナ事変【ロシアは宣戦布告をし



全国大会の参加者

二日目は、三つの分科会に分かれ、①国家意識への教化②国史国文への教化③道徳としての神道教化のグループ討議であった。私は①の分科会に所属し、国旗や国歌、神話教育、領土問題などについて実践発表や感想を述べあった。各県のベテランの先生方の豊富な実践に学びの多い時間を過ごすことができた。

平洲先生の教え「学思行相まつて良となす」

勉強を実行することが本当の学びである。

第十一回中国ブロック 研修会に参加して

出雲支部 山崎 寧子

中止が続いていた山口県での大会が三年ぶりに開催されました。総勢19名。島根県からの参加は3名でした。



防府天満宮に集合、正式参拝、記念撮影、歴史館を拝見した後、天満宮の中にある芳松庵で一服頂きました。庭も

美しく素敵な所でした。



開会行事の後、防府天満宮

の鈴木宏明宮司の講話「防府天満宮の歴史について」を拝聴しました。全国に一万二千社ある天満宮の中でも最初に創建された天神様だそうです。道真公左遷の行程は海路か陸路かを各地にある天満宮の謂

れなど調べた結果、海路であると言われていました。続いて「山頭火記念館」を学芸員さんの案内で回りました。俳

人と言われていますが、五七五とは無縁な自由詩、余りに自由な生活でびつくりでした。ホテルにチェックイン後、イタリアンのお店を貸し切ったの懇親会。これも防府天満宮の鈴木宮司が手配されたそうで、一日目、二日目全ての行程に於いて鈴木宮司にもお世話になりました。

二日目、毛利博物館へ。館長さんからいろいろ説明を聞きながら見物しました。手紙が沢山残っていて、信仰に厚かった事などがわかると言われていました。屋敷の造り、二階から見る庭の景色は素晴らしい物でした。

その後、山口県の渡邊先生を座長に「全教神協中国ブロックの各県の現況と課題」について話し合いました。各県と

も会員をどう増やすかが大きな課題となっています。

閉会式を経て、山口県での研修は終了しました。山口県の各先生方、防府天満宮の鈴木宮司には大変お世話になりました。



島根県教神協 総会・研修会について

松江支部 廣江 直澄

三年ぶりの対面形式の総会・研修会は出雲市民会館学習室を会場に開催され、コロナ禍の影響もあり10名を切る参加

者となった。順調に議事が進み審議した中で、会報の発行部数について現在800部余りを200部程度の数にする案の説明が行われた。現在の県下の全神職約600名分の配布をやめて、島根県神社庁のHPに掲載する事が了承された。

午後の研修会は、2部構成で行われた。研修Ⅰは米子市の賀茂神社天満宮宮司須山倫史氏による「今後の神社運営について」という演題で行われた。講師依頼の理由は少子高齢化による氏子数の減少、デジタル化社会に進み神社運営にも影響が出ている中、この事に果敢に取り組まれているからである。実業家としての顔を持つ氏の発言は『経営』という観点から、まず3つの

ポイントを挙げられた。①宮司の役割②収益化構造③社頭繁栄化として、更に宮司の役割を5役に分け解説された。

- (1) 神社経営(社長役)
- (2) 祭典奉仕(職人役)
- (3) 伝統文化継承役
- (4) 地域社会貢献役
- (5) 教導職役

縁もない当社で奉職されることになった氏の実体験からくる話は説得力のあるものだった。質疑応答も活発に行われ、遷宮の苦労や悩みを他所では話せなかった。と胸に秘められた想いを語られる会員もいた。今回の講演は聞く人によって捉え方が分かれるものと思った。ただ、大前提として厳粛な祭祀、伝統に裏付けられた敬虔な祈りの場所としての神社という根幹は変

わらないものである。

二本目の相互研修では、全国大会での報告が中心だった。大阪府の公立高校教諭の神職兼業の話題では、島根県の現状を確認し「兼業届けは不要で、適切な年休取得で対応できる」との事だった。今回の研修会の講演には、ご案内をした島根県女子神職会会長古瀬真由美様にもご参加いただいた。今後も共有できる課題があれば交流を続けたいと思った。



令和三年度事業報告

- ・六月十九日 現職教員等研修会 リモート方式
- ・七月十日 役員会 七名参加 松江プラザホテル
- ・八月 全教神協研修会・総会
島根県教神協総会
何れも書面議決方式
会報第四十号発行
- ・十二月下旬

令和四年度事業計画

- ・六月十八日 現職教員等研修会 神社本庁
- ・七月十日、十一日 第六十二回 全教神協全国大会
愛知県名古屋市
- ・八月二十日、二十一日 全教神協 中国ブロック研修会
山口県防府市
- ・八月二十七日 島根県教神協総会・研修会 出雲市民会館
- ・十月 会報第四十一号発行

令和五年度 予定

- ・七月二十八(金)、二十九(土) 全教神協全国大会 福島県
ホテルビューアネックス (郡山市)
- ・中国ブロック研修会 担当 島根県支部
- ・全教神協

会員寄稿

「言葉の持つ力」

松江支部 廣江 直澄

この夏、ある神職の方と雑談する中で「仏教やキリスト教は教義・經典から教えを伝えられるが、神道はその点難しいかもしれない」という話題になりました。確かに地元紙には「教え」を掲載する欄がありますが、担当されているのは住職、牧師、神父の方が殆どです。神道には教義・經典が存在しないと言われるますが、社頭講話などでは「記紀」などの神典を元に神社の歴史、由緒、ご神徳など神職が工夫しながらお話をされている事と思います。

このような会話をした今夏

に参加した全教神協全国大会で「細川平洲から学ぶおしえ」という記念講演が行われました。細川平洲とは愛知県東海市に生まれた江戸時代の儒学者・教育者です。本人が一番有名になったのは、米沢藩中興の祖上杉鷹山の師となった人物であるからでした。講師の東海市教育委員会の方のお話で「細川平洲の教えの基本は、朱子学・陽明学などの学派にとらわれず、良いところは取り入れる折衷学派である」という点が実にタイムリーで、雑談の留飲を下げるものになりました。

思い起こせば、私が管理職時代に徳育授業を担当していた時、教材として用いていたのは『論語』『孟子』『菜根譚』『呻吟語』などの中国の古典や佐

藤一斎の『言志四録』西郷隆盛の『言志録』等を始め、最新の情報や市井に語られる古今の良い話や感動逸話など多岐にわたるものを貪るようにして探していました。これらは全校朝礼での講話や校報の記事、入学式、卒業式での訓話にも繋がっていました。時には、神道の『中今』『生成発展』『常若』『浄明正直』などもアレンジを加えて伝えていました。

教神協の会員は、教育現場で多くの生徒に関わり講話、訓話、挨拶などで多くの言葉を駆使して相手に伝えてきた豊富な経験を持ちます。おそらく、社頭講話では由緒、ご神徳に加えて学校での講話、訓話、挨拶などのエッセンスを交えお話になっている事と

思います。私は、これまでの講話、訓話、挨拶などの原稿をデータとして残しています。

試しに何本か原稿作成をして参拝者、氏子、崇敬者は勿論の事、一般の方にも伝えられるように研鑽を積んでスキルアップが出来たらと思います。

今夏の全国高校野球選手権大会の優勝校仙台育英高校の須江監督の優勝インタビューを聞いて、多くの国民が言葉の持つ力に胸を熱くしたことが話題になりました。

神道は「いのちの思想」と言われることもあり、日々の生活に生かせる話が、心に寄り添える話が、希望につながる話が展開できれば素晴らしいことと思います。

奥出雲の「湯野神社」今昔

宮司 石原 肇

J R木次線亀嵩駅前の国道四三二から東に約三、五km進むと、南方に玉峰山とその麓に玉峰山荘(亀嵩温泉)が見える。北方には鳥居があり、それを潜って、石段を登り、杉や樅木の並木道の参道を約百m進むと、湯野神社の拝殿や本殿が一直線先に見え、湯野神社本殿に到達する。



遷宮後の湯野神社

当社は、出雲国風土記にも記載され、創建推定約二千年の歴史がある特別神社である。主祭神は、大己貴命・少彦名命等で、薬湯が出るところから、健康長寿の神社として、古来多くの崇敬者を集めてきている。玉峰山からは、玉の名の通り勾玉の材料となる水晶が産出されてきた。当社の末社に「玉作神社」がある。



玉作神社

参道の随神門の御神額に、「亀嵩神社」と示されている。そして神社拝殿上の御神額には、「湯野神社」とある。これは明治四十一年の合祀令

の時に、亀嵩村にあった三つの神社が合祀され、昔玉峰山麓の宮地という地名にあったとされている湯野神社の名にしたと伝えられている。境内のやや高地には、合祀に合わせ、元宮の荒神さんや牛神さんとよばれていた石碑群が、鎮座されている。

江戸時代末期には、松江藩お抱えの横綱陣幕九五郎（東出雲町出身）による、雲伯出世相撲の本場として、昭和四十年頃迄、大いに賑わった。昭和五十九年には、元横綱千代の富士（元陣幕親方）が、正式参拝され、亀嵩地区あげて盛り上がりを示した。その相撲場では、今も例大祭時の子供相撲や、体協主催の相撲大会が開かれている。

当社はまた、小説家松本清

張氏の代表作「砂の器」の映画ロケ地としても有名である。今年は、松本清張没後三十年で、映画化され四十八年となる。玉峰山荘では、九月に展示会やイベントが開催された。現在でもテレビ等のロケ地として、砂の器ゆかりの神社として観光の一役を担っている。

当社は三十五年ぶりに、「令和遷座祭」（令和元年仮遷座祭・同二年本遷座祭）を挙行した。境内の樹齢推定五百年の櫟が、長年神木として親しまれてきたが、近年古く危険なため、遷宮を機に伐採し、製材の一部を「湯野神社爾」の御神札として、氏子崇敬者にお配りした。ご尽力頂いた関係の皆様方に感謝している。



湯野神社鳥居から見た玉峰山と玉峰山荘

全教神協ホームページ

本会のあゆみ・本会の取り組み
広報誌などの情報を発信して
います。是非、ご覧ください。



<https://zksk.jp>

編集後記

長い自粛期間を経て、教神協はWithコロナに転換し、活動を再開しました。未だコロナは収まらず、教育現場は大変な状態ですが、万全な対策をした上で、子供達の未来の為、活発な活動がしていければ幸いです。また社頭においても賑やかなお祭りの復活を願っています。

玉稿をお寄せ下さった会員の先生方に感謝申し上げます。

（山崎 寧子）